

残したい枚方の自然

今回の調査では、その結果などをふまえて「残したい枚方の自然」を見いだしていきましたが、それには次のような視点でのぞみました。

①水田(棚田)、草地、樹林、ため池などの複合的な環境である里山や、水辺環境がはぐくむ生物多様性の保全 ②市街地などで孤立化した緑をつなぎ、地域全体として有機的なつながりをもつエコロジカル・ネットワークの形成 ③景観形成や生活環境の向上 ④今回の調査に参加した方々など市民の視点

リストアップしたのは95か所。それらを代表する自然は、穂谷・尊延寺地区の里山／豊かな淡水魚類相や原野の環境をはぐくむ淀川／里山と淀川をつなぐ船橋川、穂谷川、天野川などの河川／それらとともに重要な水系環境であるため池、水田——などです。



都市に残された自然環境の意義

都市のなかでそうした「残したい自然」を見いだすには、それらがどのような利点・価値をもつのかを見直しておく必要があります。ここでは4つの側面から整理しました。

①地域の人々にとっての利点・価値

枚方市は、人口の増加と市街化の拡大につれて自然景観が損なわれ、市街地に住む人たちが日常的に自然とふれあう機会が少なくなっています。急速に進む少子高齢化社会への動きのなかで、子供や高齢者が健康で充実した生活をおくるための環境をいかに整備するかが重要な課題です。特に、身近な環境のなかに自然的環境を存在させることは、市街地住民の精神的、身体的健康を維持するうえで不可欠な要素です。

②教育上の利点・価値

急速な市街化にともない、子供たちが自然と身近にふれあう場所、機会が極端に少なくなり、子供の自然に対する関心の低下や情操面に与える悪影響が深刻な問題となっています。身近なところにも質のよい自然環境を用意し、自然とふれあう場や機会を与える努力をすることは、子供の人格形成にとって大きな意義があります。

③野生生物に関する利点・価値

まとまった森林や大きな公園は、野生生物にとっての生息環境としてたいへん重要な空間で、枚方市東部に広がる里山環境を維持、保全していくことは極めて重要です。また、広範な市街地に残る孤立林を保護したり、工場跡地などに公園や緑地をつくり出したり、屋上に緑空間をつくったりすることは、点的で無意味なようにみえますが、エコロジカル・ネットワークの拠点として機能する可能性があります。



④経済的な利点・価値

都市の緑地や、それに隣接する水田、ため池などの水域は、急激な温度変化を防ぐなど、少なからぬ気候緩和機能をもつと考えられています。住民に対する「いやし」の効果までを含めると、市街地に残る自然環境の経済的な利点・価値は小さくないと考えられます。



■「残したい自然」マップ

このマップは「残したい自然」のリストをもとに作りました。市の施策を反映したものではありませんが、今後の保全のための合意形成や新たな調査の資料となります。

次のページからは、「残したい自然」と重なる「枚方の代表的な自然環境」を紹介します。



穂谷・尊延寺地区

穂谷・尊延寺地区に広がる里山は、農的な活動が営まれる農耕地、ため池、森林などのさまざまな環境が組み合わさり、人間と自然・生物が共存する地域です。棚田が多く、棚田やため池の土手には里草地の植物が豊富に生育。オオタカやサシバなどの猛きん類の生息を支える豊かな生物相もはぐくまれています。

しかし、農をめぐるさまざまな状況の変化から、里山の自然を維持していくことが困難になっています。また、開発の波をうけやすい立地にあるため、里山は全国的に失われつつあります。大阪の代表的な里山であるこの地域も例外ではありません。



棚田
山林に囲まれた棚田。緩やかなカーブを描くあぜ道。農業が機械化される以前につくられた田、畦はヒューマンスケールになっており、親近感をもたらし。



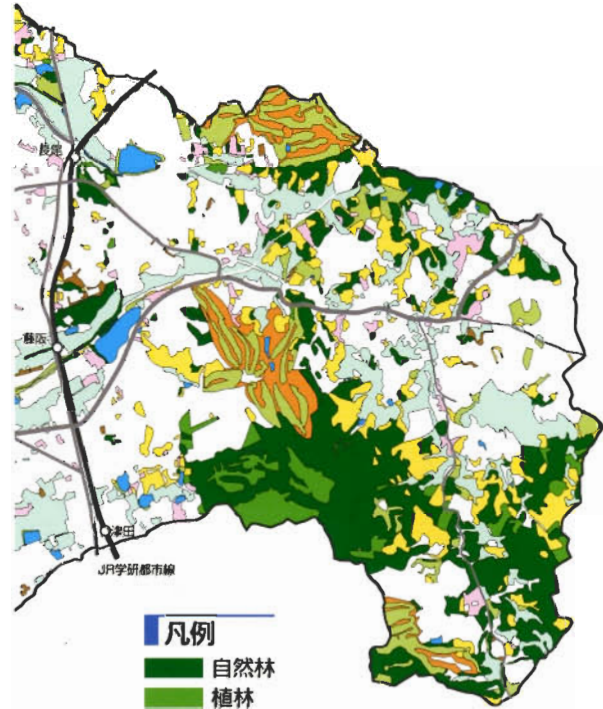
田んぼと山林の境目
山林と田んぼの連続性を確保する溝。成体は樹林で生活し、水田等の浅い湿地で産卵する生物(ニホンアカガエル等)にとって、コンクリートで固められた水路は致命的。



農道と畦
年に3~4回の草刈りによって刈り込まれた畦に生育する草原性の植物は、最終氷期の生き残りと考えられており、畦の減少にともなって絶滅の危機に瀕している。



湿地
ため池の浅瀬に成立する湿地。市内の湿地は、ほとんどため池や水田に付随するものである。湿地に生育する水草には絶滅危惧種も多い。



- 凡例**
- 自然林
 - 植林
 - 草地
 - 竹林
 - ゴルフ場内樹林
 - 園地
 - 畑
 - 水田
 - 水域
 - 鉄道
 - 道路



尊延寺の棚田
通常、傾斜度が1/20以上の傾斜田を棚田と呼ぶ。傾斜の厳しい地形条件は、営農上の労力も大きく、高齢化にともなって耕作放棄につながる場合も多い。



圃場整備
直線的な広い道路。排水路のコンクリート化や乾田化がすすみ、生物にとっての水田環境は大きく変化した。

淀川などの河川

淀川は、古来より治水、利水のために改修が進められてきた河川で、魚種の豊かさや貴重種の生存する水系としても知られています。なかでもワンド群の重要性が深く認識され、枚方でもワンドの再生が図られてきています。

一方、かつて淀川にあった植物の多くは、水域と陸域を完全に隔離するような河川改修、都市公園的な整備によって失われています。こうしたなか、重要性の高い原野の植物が豊富な地区として、楠葉付近があげられます。



河川敷

河川敷公園は、施設広場地区、野草広場地区、自然地区、景観保全地区の4タイプに区別される。探鳥会が定期的開催され、四季折々、様々な鳥が記録されている。



ビオトープ

河川敷公園に創出されたビオトープでは、ランド整備によって消失したヨシ原を復元し、鳥類、昆虫類の生息地として回復のきざしがみられる。



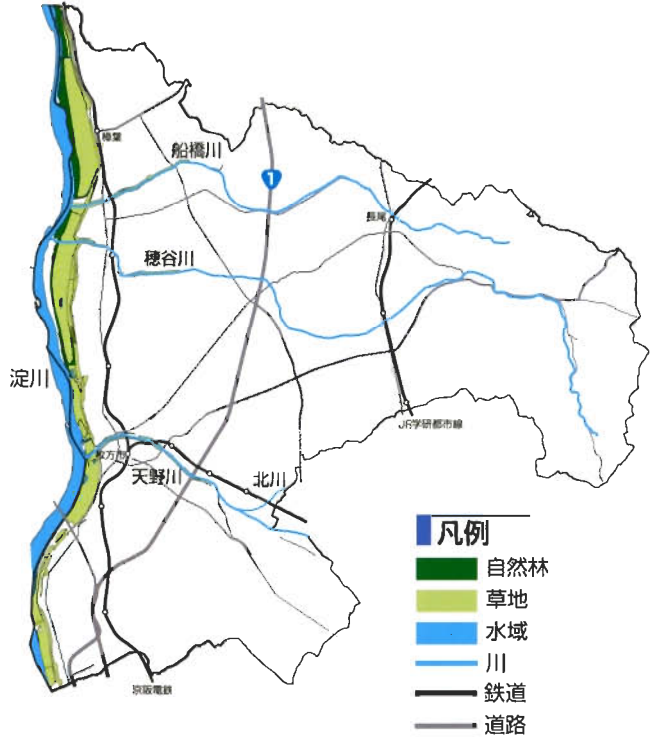
たまり

釣り人が多い。移入種の水草ボタンウキクサが大繁殖している。



河川敷公園の親水空間

陸域と水域との移行帯をもたない水際。市民が水に親しむ空間を提供する。



各地の河川は、相次ぐ改修によって流路の直線化やコンクリート護岸化が進み、河川のもつ本来の自然は失われつつあります。船橋川、穂谷川、天野川も例外ではなく、生物相も単純化しています。また、水質汚濁も生物に影響を与えていると考えられます。しかし、調査では、河床状況の変化などに影響されやすいヨシノボリ類や、水質汚濁に弱いモクスガニが確認されるなど、回復の可能性があることもわかりました。



河口部の魚道

成長とともに川をさかのぼる魚や、増水で下流に流された魚が堰を越えるためには、魚道が必要である。



天野川と北川の合流部

河川の連続性を活かし、水と緑のネットワークを形成することが期待される。



ザリガニを釣る子ども

コンクリート護岸やクスなどの繁茂で、河川水辺へのアプローチはきわめて限られる。小学生が、橋下の護岸を下ってザリガニ釣りを行っている。



穂谷川山田池付近

両岸をササや中低木が覆い、水面に陰をつくる。ここは、水鳥の生息地となっている。現地調査で確認された魚類は少なかった。